

---

# 錦繡事変（きんしゅうじへん）

猫目石

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
錦繡事変

【ZPDF】

Z9880X

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

りんが大雨の中、行方知れずになつて三年。  
西国では大掛かりな紅葉狩りが催されることになつた。  
国主の殺生丸以下、主だつた重臣がすべて揃つ秋の宴。  
さて、何が起きるか？

11部の連載です。

?

朱色、鴉色、蜜柑色、深緋、雌黄、木賊色、芝翫茶、松葉、縹色、  
山吹、海松茶、鴉色、臙脂、この紅葉の見事さをどう表現すればいいのだろうか。

『筆舌に尽しがたい』とは、まさにこの事を言つのだらう。次から次へと色の名を挙げてみると、きりが無い。

ああ、もう、よそう。

ともかく、赤から黄、茶色から緑と、あらゆる色彩が見事な諧調を保つて全山を覆い尽しているのだ。  
まさに錦秋の名に恥じぬ場景が広がっている。

こゝは西国でも紅葉の名所として名高い錦繡山脈の中に位置する小さな盆地。

周囲をグルリと紅葉に彩られた山々に囲まれたすり鉢状の大地である。

敷地に換算すれば三千坪ほどになるだろうか。

盆地のそこかしこに自生する優に千年の樹齢を数えるに違いない銀杏や楓の大木。

その周囲に沿つて、これまた様々な色の毛氈もうせんが敷き詰められている。

赤、青、緑、黄、紫、茶、白、黒と頭上の紅葉と競つよう鮮やかな色彩が乱舞している。

それは、まるで島のように各家の陣地を主張している。

当然、且ぼしい大木は有力な家々が独占している。

中でも、一際、見事な大紅葉の大樹の根元には血のように赤い猩々の毛氈じょうじょが敷き詰められていた。

先代の西国王、殺生丸の父、鬪牙王の母方の従兄弟に当たる豺牙一門の物である。

赤毛氈の上座に当たる位置には、漆黒の絹地に金糸、銀糸の刺繡で飾られた対の座布団と脇息が置かれ主賓の着座を今や遅しと待ち構えている。

「宴の準備は万端、急りないであらうな」

「ハツ、豺牙様に命じられた通りに全て整つております」

小山のような体躯に縮れた赤毛の男、豺牙は家臣の言葉に一ヤリと笑つた。

太い眉、丸い大きな目、突き出た鷲鼻、大きな分厚い唇、気の弱い者なら怯えて泣き出しそうな魁偉な容貌である。

「お父さま、殺生丸さまは本当にお越しになるので」やれこましうね」

赤い髪の美女が豺牙に問いかける。

豺牙ご自慢の愛娘、由羅である。

幼い頃に亡くなつた美人の母親似なのだろう。

由羅は髪の色こそ父親と同じ赤毛だが中々の美姫である。

純白の白絹に秋の草花を散りばめた豪華な打ち掛けを身に纏う由羅は見ようによつては花嫁のように見える。

豺牙が普段の銅鑼声からは及びもつかない潜めた声で由羅に注意を

促す。

「間違いない。よいか、由羅。そなたの魅力で、必ずや、あ奴を骨なしにするのだぞ」

「うふふつ、お任せ下さい、お父さま。必ずや殺生丸さまを私の虜<sup>とり</sup>にしてみせますわ」

己の容貌に相当な自信があるのだろう。

由羅は紅い唇をほころばせ高慢な言葉を返す。

外見こそ余り似ていないものの、そこはやはり親子、由羅の内面も父親の豺牙と大して変わりがない。

つまり、どこまでも権力と財力を追い求める欲望の権化なのである。

遠い空にポツリと小さな点<sup>しづつ</sup>が映つた。

それは良く見ると一列に連なった行列でコックリと盆地に近付いてくる。

列の先頭を走るのは希少な双頭の竜、阿吽に跨<sup>またが</sup>つた西国王、殺生丸。右肩に流れる華麗な白銀の毛皮には従者の小妖怪、邪見がしがみ付いている。

その後に重臣の尾洲と万丈、側近の木賊と藍生、殺生丸の乳母であつた女官長の相模、以下、続々と家臣が続いている。

「おいでになつたようだ。皆の者、そそつになつようつお持て成しいたせ」

「 「 「 「 「 「 「 ハツー 」 」 」 」 」 」 」

野太い声の主の命令に家臣一同が声を合わせて答える。

同時に豺牙は腹心の部下に田をやり声なき合図を交わしていた。

(手筈は良いな?)  
(仰せのままに)

これまで豺牙は殺生丸と由羅を結びつけるべく様々な策を巡らしてきた。

当代の西国王、殺生丸には先祖の呪のせいもあって親類縁者が非常に少ない。

だからこそ、殺生丸の父の従兄弟という本来ならば遠縁でしかない豺牙が、当主が不在の間、縁戚として権勢を揮うことが出来た。だが、本来の主、殺生丸が帰還した今、以前のように西国王の縁戚として好き勝手に税を徴収したり領地を強奪する真似は出来なくなつた。

それどころか、旧悪を暴かれる怖れさえある。

このまま手を拱<sup>ひまね</sup>いていては縁戚としての立場さえ危うい。

そう考えた豺牙は、より強力な立場を手に入れるべく、即、行動を開始した。

西国王の舅<sup>じゅう</sup>という外戚<sup>がいせき</sup>として、これ以上ない強力な立場を手に入れる為に、豺牙はあらゆる機会を通して自分の娘の由羅を売り込んだ。殺生丸と由羅が婚姻を結んだ後は男子を産んでくれれば万々歳。そうなれば男孫を後継者として擁立<sup>ようりつ</sup>し、その後見としてジワジワと

立場を強め西国の大権を握る。

だが、そうした豺牙の計画を阻害する存在が浮き彫りになった。三年間、殺生丸が欠かさず三日おきに通う人里に住まう人間の小娘。邪魔な芽は摘まねばならない。

周到なる準備の下、豺牙は部下に命じて人間の小娘を始末させた。まず大水を降らせる為に雨師と風伯に頼み込み大水を降らせた。その上で毒蛾の蛾々が幻想の術で増水した川の近くに小娘を誘き寄せ川に落とし込んだのだ。

状況から見て誰もが溺死したと思つただろう。もつ今から三年も前のことだ。

豺牙は、この宴が事実上の婚礼と周囲の者に認識されるよう画策してきた。

真紅の毛氈、対の座布団、脇息、御膳立ては全て調つた。

後は主役の殺生丸と由羅さのが揃いさえすれば良い。

殺生丸に饗きょうする酒には予め強力な媚薬を仕込ませてある。

国主の殺生丸を始めとして犬妖族は尋常ならざる嗅覚を有している。人間なら、到底、気付くはずもない微かな異臭でさえ彼らは感知する。

それをごまかす為に屠蘇散を大量に入れ『薬酒』と銘打つて用意させた。

更に酒肴しゅようには精力を増強させる山海の珍味佳肴ちんみかうを取り揃えてある。要は主賓の場に殺生丸が就いてくれさえすれば、ほぼ豺牙の企くわだては成就するのだ。

後は済し崩しに婚姻を成立させてしまえば良い。

己が田論みの成功を確信した豺牙は込みあげてくる笑いを押し殺すのに苦労していた。

『きんしゅう錦繡事変?うじへん』に続く

?

りんが生きていると殺生丸が知つてから、かれこれ一年が経とうとしている。

の方士、方斎の占いでは、りんは間もなく戻つてくると聞いた。それ以来、殺生丸は暇を見つけては人界へ渡り、りんを捜し歩いた。だが、僅かな手がかりさえ見つからず現在に至る。

本当に、あ奴の易占は当たるのだろうか？  
日毎に殺生丸は苛立ちは<sup>つ</sup>慕らせていた。

（りん、りん、何処にいる！？）

今日とて人界へりんを捜しに行きたいのに、ぐだらぬ催しに顔を出さねばならぬ。

紅葉の宴だと！？

ハツ、何でも豺牙<sup>さいが</sup>めが強硬に主張したらしい。

豺牙・・・今は亡き父上の母方の従兄弟。

本来なら縁戚とも言えぬような遠縁。

にも拘らず私が西国を留守にしていた間、あ奴は血筋を盾に要職に就き、散々、甘い汁を吸つてきたりしい。

典型的な虎の威を借る狐だ。

大して能力もない癖に権力欲だけは強い輩などに用はない。

少し奴の身辺を調べただけで唾棄するような不正行為がゴロゴロ出てきた。

悪行の証拠を突き付け一日も早く罷免<sup>ひめん</sup>してくれわ。

罪状が目に余るよつなら死罪もありつる。

そんな物騒な思いを抱きながら殺生丸は阿吽から降りた。

すると、こちらの到着を待ち構えていたのだろう。

豺牙がゾロゾロと一門を引き連れてやって来た。

一応、奴が一番近い親戚筋になるからな。

見るともなく目をやれば満面の笑顔が氣色悪い。

テラテラと赤い顔は恐らく酒浸りのせいであろう。

『相変わらず、いけ好かない奴だ』と殺生丸は感じた。

心中では、こちらを青一才と嘲りながら表面上は甘言を弄して従う素振りを見せる男。

殺生丸は豺牙の顔を半眼で眺めつつ、益々、内心の決意を固めた。

「ようこや、おいで下されました、殺生丸殿。たせり、どひそこちらへ

やけに上機嫌な豺牙が挨拶もそこそこに主賓の座に殺生丸を着かせようと先に立つて歩き始める。

用意された宴席を見れば猩々緋の毛氈に設けられた豪華な対の座布団と脇息。

その設えを見た殺生丸は勿論、従者の邪見、重臣の尾洲、万丈、側近の木賊、藍生、女官長の相模が一様に顔を顰めた。

瞬時に豺牙の狙いを読み取ったのだ。

本来ならば主賓は殺生丸のみ、座布団は一密で良いはず。  
それなのに、何故、座布団が対なのか？

一方の座布団に殺生丸様が座るとして、もう片方には誰が？  
見ている限り、豺牙が横に座る気は毛頭ないらしい。

尾洲や万丈は重臣ではあるが家臣の為、殺生丸の横に座る訳にはいかない。

側近の木賊や藍生、女官長の相模にしても同様である。

となると、この場において殺生丸の隣りに座ることが許される身分の者は唯一名。

豺牙の娘、由羅のみである。

不味い！

この状況は非常に不味い！

これが単なる茶を飲む程度のことならば問題はない。

しかし、この場は酒食を供する宴席。

しかも、由羅の装いは純白の綿地に秋の草花を散らした美々しい打ち掛け。

見ようによつては、まるで花嫁のように見える衣裳。

いや、気のせいではない。

明らかに、そう見えるよう意識して装つたに違いない。

『謀られた！』

殺生丸を始め一行の誰もが豺牙の意図する処に気付いた。

豺牙に誘導されるまま殺生丸が席に付けば相手の思つ壺に嵌まつてしまつ。

何しろ、この宴には西国の主だった者が集まつている。

このままでは紅葉の宴が婚礼のお披露目の宴と勘違いされてしまつ怖れが多分にある。

殺生丸は西国に帰還して以来、これまで一度も公式の催しに出席したことがない。

謂わば、この紅葉の宴が初の『お目見え』となる。

事前にそうと知ったせいだらう。

今回の宴に参加する家の数が鰻登りに跳ね上がつた。

そうと知つた上での豺牙の强行だつた。

豺牙は高を括つていた。

礼儀から云つても殺生丸が着座を拒否するはずがないと。

それに男なら美しい娘が同席するのを喜びこそすれ否みはすまいと勝手な思い込みをして。

周囲がやきもきする中、豺牙の娘、由羅はウットリと殺生丸に見惚れていた。

双頭の竜に乗つて空から降り立つた西国王は尊に違わず美しかつた。白銀の髪は陽を弾いて煌き秀麗な容貌は寸分の狂いもなく刻まれた彫像のように端整で夢のように麗しい。

三年前に帰還して以来、殺生丸は西国内では武家の棟梁に相応しい直垂を着用するようになつていて。

以前の振袖と指貫に妖鎧を装備したお馴染みの戦装束は専ら人界へ赴く時のみとなつてゐる。

今、殺生丸がお召しになつてゐるのは青味を帶びた銀の共布で仕立てられた直垂。

光沢のある絹地に織り出された見事な柄行は優美に空を舞う鸞の姿。腰に差すのは一本の大刀、朱塗りの鞘の天生牙と白木の鞘に雷紋を彫り込んだ爆碎牙。

優雅にして華麗、尚且つ凜々（りり）しい貴公子ぶりに男女に限らず誰もが目を奪われた。

由羅とて例外ではない。

初めて見た殺生丸に一目で心惹かれた。

（何としても、あの若く美しい御方の妃になりたい）

由羅の心にムクムクと願望が湧き上がる。

殺生丸を己の容色で籠絡しようと宴に乗り込んできた由羅は逆に西国王の美貌に魅せられ、あからさまに秋波を送っていた。

このまま、父、豺牙の狙い通りに事が進めば由羅の望みが現実となる可能性は高い。

妖界でも最大領土を誇る大国、西国<sup>さなか</sup>の王、その妃ともなれば誰もが傅き、どんな贅沢も我<sup>ままである。</sup>が儘

それは、まさしく由羅が思い描いてきた栄耀栄華に満ち溢れた未来そのものと言つていい。

殺生丸の傍らに妃として寄り添う己<sup>おの</sup>がの姿を想像して由羅は独り悦に入っていた。

由羅が白昼夢に浸つてゐる最中<sup>さなか</sup>、周囲がザワザワと騒ぎ出した。

見れば、皆、空を仰ぎ見ている。

不思議に思つて視線を空にやれば、静々（しずしず）といひひに近付いてくる一群が目に入った。

遠目にも一群が煌びやかな女性<sup>じょじょ</sup>の集団とハツキリ判る。

中央の牛車を守るようすに十数名の女房衆が周囲に控えている。

それは、今回、誰もが出席するとは予想もしなかつた西国一の貴婦人、前西国王妃にして当代西国王、殺生丸の御生母さま、いぬき狗姫の御方の御一行だつた。

【直垂】ひたたれ：「犬夜叉」『ミックス13巻に登場する若殿、ひとみかげわき人見蔭刀殿（＝奈落）の城内での衣裳を参考にして下さい。

『錦繡事変？』に続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9880x/>

---

錦繡事変（きんしゅうじへん）

2011年10月29日14時19分発行